

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：14301

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2016～2019

課題番号：15KK0033

研究課題名（和文）インド密教における観想法と曼荼羅儀礼の包括的研究（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of Meditation and Mandala Rituals in Indian Tantric Buddhism (Fostering Joint International Research)

研究代表者

菊谷 竜太 (Ryuta, KIKUYA)

京都大学・白眉センター・特定准教授

研究者番号：50526671

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 8,600,000円

渡航期間：12ヶ月

研究成果の概要（和文）：インド密教における観想法と儀礼との関係性を読み解くうえで欠かせない曼荼羅儀軌について、ハンブルク大学ハルナガ・アイザックソン教授の協力のもと、ディーバンカラバドラの『ローカーローカカーリカー（四百五十頌）』「前段階の奉仕儀礼」部分の校訂・訳注研究を行った。得られた研究成果については、現在出版の準備を進めており、また成果の一部については、すでに「サンスクリット写本研究ネットワークの構築に向けて」というテーマでハンブルク大学にて国際シンポジウムを行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

インド密教の儀礼において最も影響を与えたと考えられる曼荼羅儀軌『ローカーローカカーリカー』について、新出梵文写本を使用し、「前段階の奉仕儀軌」部の校訂・訳注作業を行った。この作業にあたって得られた写本の相関関係やテキストの成立背景は、インド・チベットにおける密教注釈文献の形成過程を明らかにするうえで重要なポイントであると考えられる。さらに研究によって得られた梵文写本研究の人的ネットワークを通じて国際シンポジウムをハンブルク大学にて開催した。

研究成果の概要（英文）：Mandala manual (mandalavidhi/mandalopayika) is key-points to analyze the relationship between meditation and rituals in Indian Tantric Buddhism. In collaboration with Professor Harunaga Isaacson of the University of Hamburg, I was engaged with making critical edition and annotated translation of the Purvasevavidhi part of Dipamkarabhadra's Lokalkarikā. We are preparing to publish this research, and some of them have been described in the International A symposium "Towards the Construction of a Sanskrit Manuscript Research Network" at the University of Hamburg.

研究分野：インド・チベット仏教学

キーワード：インド密教 曼荼羅儀軌 ディーバンカラバドラ 『ローカーローカカーリカー』 『四百五十頌』
ラトナーカラシャーンティ ヴィドヤーバーダ アバヤーカラグプタ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

イメージの操作術と言うべき曼荼羅の観想法(成就法)は、密教におけるあらゆる儀礼と不可分の関係にあると共に、医術・建築・法典文献における「受胎」あるいは「死と再生」の理論の形成と伝達に重要な役割を果たしてきたと考えられるが、観想法と儀礼の関係が十分に明らかにされたとは未だ言えない状況にある。その直接的な要因としては、解読に必要な梵文(サンスクリット)原典の多くが未刊行の状態であること、校訂された一部のテキストの原資料が不完全であるため複数の修正すべき問題が残されていることが挙げられよう。梵文写本がもつ個別の情報をテキストおよび画像データ化し、さらに研究者同士が迅速に情報を共有しうる環境を構築しつつ信頼すべき校訂テキストと訳注とを同時に構築することが第一に求められる。

梵文写本の研究は、情報技術の発展に伴って近年急速に進展し、世界各国で膨大な写本のデータベース化が進められている。カタログや画像データの一部は、すでにインターネット上に公開されている。こうした動きの中で、本国際共同研究のハンブルク大学アジア・アフリカ研究所は Nepalese-German Manuscript Cataloguing Project (NGMCP) という名のもと、精力的に写本の蒐集・デジタル化を行ってきた。同研究所はインド・チベット語語彙集成プロジェクトというべき Indo-Tibetan Lexical Resource (ITLR) をも推進する。インド学・仏教学における情報共有の流れはイギリス、アメリカなど他の欧米各国においても共通するが、データベース構築についてはあくまで前提となる写本を読み解く校訂・訳注作業なくしては成立し得ない。

2. 研究の目的

こうした状況のなかで、筆者はその重要性が指摘されながらもこれまで研究を停滞させてきた一次資料の不備を補うべく、インド密教において最も長い伝統を保持し続けた『秘密集會』ジュニャーナパーダ流の原典研究を過去の採択課題「インド密教における観想法と曼荼羅儀礼の包括的研究」として進めてきた。同研究は申請者の過去の校訂・訳注研究に基づきながらも、新たに見出された『ローカーローカカーリカー』のサンスクリット原典の写本を使用し「曼荼羅儀軌」と呼ばれる儀礼集成の解読を通じてインド密教におけるさらなる研究基盤の獲得を推進するものである。同書は特定の聖典・流派を越えて広範囲に受容されており、他のヒンドゥー諸派、あるいはネパール建築儀礼書にも大きな影響を与えた。

『ローカーローカ』の研究は単に儀礼マニュアルにとどまらず密教注釈文献の研究であるとも言え、インドにおける聖典と注釈文献の関係性を明らかにすることにつながる。

3. 研究の方法

従来申請者が使用してきたゲッティンゲン写本の他に、近年発見されたケンブリッジ写本を積極的に用いて研究を行う。両写本は別系統に属すると考えられるが、前者は最終葉を欠き、後者は第一葉を欠いているものの、全体の梵文が二つをあわせて明らかになり、原典の全体が閲覧できるようになった。

4. 研究成果

インド密教儀礼における総合マニュアル「曼荼羅儀軌」は、上記の「受胎」あるいは「死と再生」を含めた教理内容に対する注釈書的な側面をもそなえ、同じく儀礼を扱うタントラ聖典注釈書とは極めて密接な関係にある。筆者は『ローカーローカカーリカー』を研究するかたわらこのような性格をそなえたアバヤーカラグプタによる大部の曼荼羅儀軌『ヴァジュラーヴァリー』解析作業を並行して進めていたが、調査の過程において同じくアバヤーカラによる『サンプトードヴァタントラ』の広注『アームナーヤマンジャリー』の重要性を強く認識し、急遽同書の全体像をも視野に入れた校訂・訳注研究を行う必要性に迫られ、並行して研究に着手した。

インドにおける注釈文献の傾向と内容については、主に仏教タントラ(密教)文献にもとづき Harunaga Isaacson・Francesco Sferra 両教授によって概要が明らかにされている(Isaacson-Sferra [2015])。すなわち、①tippanī、②ṭīkā、③nibandha、④pañjikā、⑤paddhati、⑥vivarāṇa、⑦vivṛti、⑧vṛtti、⑨vyākhyā、⑩bhāṣya、⑪vārttika というこれらの一般的に注釈に相当しうる語のうち、⑩⑪は密教には見出されず顕教あるいは他のヒンドゥー諸派の間で用いられ、②⑦は比較的長く、①④⑧は比較的短い解説の傾向にあるものの、密教においては②④はしばしば同義語として用いられる。さらに解釈の際に用いられる基準が1) uddeśa・nirdeśa、2) pratyuddeśa・pratīnirdeśa、3) mahoddeśa・mahānirdeśa という聖典分類法に関わる三つの解釈階梯である。1) が根本・略出聖典による説示、2) が聖典の釈説・語釈(④)、3) が引用を含めた詳細な解説(②)に当たると説明されるが、2) が1) に付随する聖典・釈タントラを指す場合もある。

このように密教注釈文献を扱うためにはまず前提として仏教内におけるその性格を明らかにしたうえで仏教以外の文献をも視野に入れる必要がある。Alexis Sanderson 教授によって指摘されているように、低次から高次へと至るシヴァ教聖典と極めて類似した階層構造は密教の聖典分類法にも見出すことができ (Sanderson [1988, 1994, 2007, 2009]、片岡 [2008]、種村 [2010, 2013])、シヴァ教におけるこうした構造が密教における聖典あるいは注釈文献の成立に関して影響を与えたとも考えられるからである。

このような視点のもと、『ヴァジュラーヴァリー』と『アームナーヤマンジャリー』から得られる情報に目を向けながら、『ローカーローカ』と注釈文献との比較・対照研究を筆者は続けていたが、研究を進めるうちにヴィドヤパーダ (9世紀頃) が伝える『四百五十頌』の注釈的側面が上述した三つの聖典解釈階梯につながっていることに気づいた。すなわち、1) ジュニャーナパーダの曼荼羅儀軌『二百五十頌』が根本聖典に相当し、2) 彼の弟子ディーパンカラバドラがまとめた『二百五十頌』に対する釈説が『四百五十頌』すなわち『ローカーローカ』に当たる。3) さらにこの『ローカーローカ』に対しヴィタパーダとラトナーカラシャーンティがそれぞれまとめた注釈が詳細な注釈・広注に相当しており『ヴァジュラーヴァリー』もまたその延長線上にある。以上の関係は『二百五十頌』をはじめとするジュニャーナパーダの著作がいずれも「文殊の口伝」に由来するものであり、聖典として扱われることに起因するものと思われる。

ラトナーカラシャーンティの『ローカーローカ』注にはさきの『クスマーンジャリ』と共通する解釈基準が示されており、ヴィタパーダ注には注釈の基本五項目のうち、著述目的 (prayojana)、内容・主題 (abhidheya)、関係 (sambandha)、が複数の『普賢成就法』注同様に用いられる点も注目すべき点である。このように曼荼羅儀軌を中心とした密教儀礼研究についても注釈文献の構造解析にもとづく研究が極めて重要と言えよう。なお、「受胎」あるいは「死と再生」の理論についてであるが、ジュニャーナパーダ流においてその基盤となる「四支」と「四果」との関係はジュニャーナパーダ自身の著作では明確ではなく事実上ディーパンカラバドラによって導入されたものであることが明らかになった。このことは『普賢成就法』の注釈群の記述からも支持されうる。

以上のようにこれまで継続的に進めてきた曼荼羅儀軌研究に加えて新たに密教注釈文献に関する研究を追加することによって、申請者はこれらを両輪とした新たな研究基盤を獲得できた。

以上の得られた研究成果については、渡航期間内に国際シンポジウムとワークショップ「梵文写本研究国際ネットワークの構築に向けて」をハルナガ・アイザックソン教授と堀内俊郎博士と共同でハンブルグ大学において実施した。その開催内容は以下の通りである。

- ・ International Workshop and Symposium at Hamburg University Toward a Construction of an International Network of Sanskrit Manuscript Study, Universitat Hamburg, Asien-Afrika-Institut, Department of Indian and Tibetan Studies, Alsterterrasse 1, D-20354, Hamburg, Germany
- ・ Schedule: March, 2020, 8th (Sun): 9:00-9:15: Opening Speech (Harunaga Isaacson, Ryuta Kikuya, Toshio Horiuchi), 9:20-12:00: Āmnāyamañjalī reading (Kikuya), 13:30-15:30: reading by Kazuo Kano, 15:45-17:30: Symposium (Horiuchi, Kikuya), 9th (Mon): 9:00-11:30: Amnāyamañjalī reading (Kikuya), 13:00-17:30: Arthaviniścayasūtranibandhana reading (Horiuchi), 10th (Tue): 9:00-11:30: reading of other texts and discussion

最終的に出版・公開を予定している内容は次のとおりである：1) イントロダクション、2) ディーパンカラバドラ『ローカーローカカーリカー』「前段階の奉仕儀軌」梵文・蔵訳校訂ならびに訳注研究、2) ヴィドヤパーダ・ラトナーカラシャーンティ両注の蔵訳校訂テキスト、3) アバヤーカラグプタ『ヴァジュラーヴァリー』・『アームナーヤマンジャリー』当該部分の校訂および訳注研究、4) 『ローカーローカ』ヴァースインデックス+注釈における位置対応表、4) 原語 (サンスクリット・チベット語) 索引+語彙解説、5) 語形・韻律・文法解説、6) 事項索引、7) 文献一覧

上記の出版・公開にあたっては、出版を予定している単著と重複する内容は可能な限り避け、Harunaga Isaacson 教授の協力のもと、全体を英語で出版することを予定している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 菊谷竜太	4. 巻 12
2. 論文標題 「秘密集会曼荼羅儀軌『世間光』（『四百五十頌』）」第1偈に関するラトナーカラシャーンの注解	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Acta Tibetica et Buddhica	6. 最初と最後の頁 40ページ
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊谷竜太	4. 巻 50
2. 論文標題 『四百五十頌』Sardhatrisatika覚え書	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 密教学研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 菊谷竜太
2. 発表標題 ラマダンバ・ヴァジュラーヴァリー28幅曼荼羅集について
3. 学会等名 印度学宗教学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菊谷竜太
2. 発表標題 アバヤーカラグプタのホーム儀軌『光の花房』Jyotirmanjariについて
3. 学会等名 密教研究会学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菊谷 竜太
2. 発表標題 インド密教における術語の収集にあたって アパヤーカラグプタの『アームナーヤマンジャリー』とプトウンの『サンプタ広注』について
3. 学会等名 平成30年度パウツダコーシャ第1回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菊谷 竜太
2. 発表標題 『四百五十頌』Sardhatrisatikaの伝承について
3. 学会等名 印度学仏教学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菊谷 竜太
2. 発表標題 インド密教におけるホーマ儀礼
3. 学会等名 ブラフマニズムとヒンドゥイズム第5回シンポジウム・「古典インドの哲学と学問 始まりと展開 」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菊谷 竜太
2. 発表標題 インド密教における灌頂次第とタントラ階梯
3. 学会等名 ブラフマニズムとヒンドゥイズム第6回シンポジウム・「古代・中世インドの王権と宗教」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菊谷 竜太
2. 発表標題 ジュニャーナパーダ流における『二百五十頌』と『四百五十頌』について
3. 学会等名 日本密教学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 菊谷 竜太
2. 発表標題 「ヴァジュラーヴァリー曼荼羅集」について
3. 学会等名 白眉セミナー
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 菊谷 竜太
2. 発表標題 新出『四百五十頌注』梵文断片について
3. 学会等名 印度学宗教学会第61回学术大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菊谷 竜太
2. 発表標題 インド密教における注釈文献の伝承について 『四百五十頌』を中心に
3. 学会等名 令和元年密教研究会学术大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ryuta KIKUYA
2. 発表標題 Light of the World The Transmission of Guhyasamajamandalavidhi/Lokalokakarika-mandalopayika/Sardhatrizatika from Jnanapada and Dipamkarabhadra to Abhakaragupta via Ratnakarasanti
3. 学会等名 Colloquium in Hamburg university, Asien-Afrika-Institut
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菊谷 竜太
2. 発表標題 インド密教における曼荼羅儀軌と注釈文献
3. 学会等名 インド思想史学会第26回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ryuta KIKUYA
2. 発表標題 Lost Collection of Vajravali painting sets
3. 学会等名 INTERNATIONAL WORKSHOP AND SYMPOSIUM AT HAMBURG UNIVERSITY, Toward a Construction of an International Network of Sanskrit Manuscript Study
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	ハルナガ・アイザックソン (Isaacson Harunaga)	ハンブルク大学・Asien-Afrika-Institut・Professor	